

ステークホルダーからのメッセージ

ステークホルダーの皆さまから本報告書についてメッセージをいただきました。JR東日本グループはこうした方々からの声を真摯に受けとめ、今後の社会・環境活動に活かしていきたいと考えています。

環境監査研究会 代表幹事 GRI理事 後藤 敏彦氏



ハイライトと活動報告でかなり編集方針がちがうのはおもしろい。多様なステークホルダーを対象とした報告書でもあり、専門家以外の読者に対してはハイライトのみの別刷りで充分、耐えられるものと思う。活動報告をQ&A方式にしたのも、読みやすさやわかりやすさを追求した工夫で評価できる。ただ、次のことなどについてさらに工夫を重ねたら、もっとよいと思う。

- ・ガイドラインとの対比で全体像が見えなくもないが、QとQとの関連が少しわかりにくい。
- ・個別の取り組みはわかりやすい

が全体方針が見えにくい。例えば、「鉄道事業の目的は生活を豊かにすること」ということに対して、中長期の具体的な全体方針と目標などが見えない。個別項目についても、例えば、ISO14001について全社的にいつまでにどうするか、などの方針など。

最後に、風力など自然エネルギーにもっと徹底して取り組んでほしい。競争力にもつながると思う。

東京大学 社会情報研究所 教授 廣井 脩氏



防災情報や環境情報を研究している関係で、JR東日本グループには友人・知人が少なくなく、駅構内のゴミの回収や廃棄物の再利用、新幹線等の騒音対策などの話は聞いていたが、報告書を見て、もっと総合的で多岐にわたる環境対策が行われていることがわかった。いかにして良好な環境条件を子孫に伝えていけば、私たちに課せられた大きな課題であり、今後ともこのような試みを続けてもらいたいと思う。

もう何年前になるか、多発する踏切事故に対して、JR東日本が事故防止対策を考える委員会を発足したことがあった。この委員会では、

警報装置の増設をはじめ、障害物検知装置や2段式遮断機の設置を提言し、この提言が精力的に実行に移された結果、以後、踏切事故は激減の一途をたどった。対策の効果がこれほど顕著に現れたケースはめったにないのではないかと。現在、事故とその対策を風化させないための「事故の歴史展示館」を設置しているのも、情報公開時代の趨勢にかなったものである。事故対策はもちろん、大地震に備えた高架橋や駅の耐震補強の推進、大地震時のターミナルでの混乱收拾対策など、一層の努力を期待している。

株式会社大和総研 経営戦略研究所主任研究員 GRI日本フォーラム評議員 河口 真理子氏



この報告書は身近でも意外と知られていない鉄道会社の活動範囲の幅広さを認識させてくれます。主に電車の運行、顧客、オフィス駅ビルの運営の3局面から発生している環境負荷の状況。また、路線のある地域社会に与えるさまざまな影響や、駅というコミュニティをマネジメントするという社会的な視点など、幅広く目配りされた活動が読み取れる報告書です。パフォーマンス実績でも事業から発生するCO₂排出量は90年度比16%、単位輸送量あたり列車消費エネルギーが10%低下、環境経営指標も2割近く改善しており、環境経営が成功している

ことも高く評価されます。一方、多岐にわたる活動が平板に羅列され全体像がつかみづらいのが欠点です。優先順位がわかるようメリハリが必要でしょう。エコな輸送手段に力点を置くなら、省エネ車両の細かい分類や投入状況、自己発電や自然エネルギー導入状況の詳細な開示や、環境会計の経済保全効果でも内訳や定義式など欲しいところです。また事例としてパークアンドライドがありますが、単なる鉄道の延長でない121世紀型移動サービスとコミュニティビジネスという夢のある長期ビジョンを掲げると鮮明な将来像が浮かび上がるのではないのでしょうか。

グリーンコンシューマー 東京ネット 幹事 秋元 洋子氏



省エネルギー車両の導入、ゴミの再資源化率アップ、インターモダルの推進と、環境に配慮した取り組みはJRを利用する時身近に感じています。

混雑の緩和を図ると同時に、列車運行のためのエネルギー消費を下げるにはどうしたらいいのでしょうか。券売機の前でまごついたり、ホームでエレベーターを探したり、乗り換えがわからずうろたえたり、聞き取りにくい車内アナウンスに閉口したりという経験が多々あります。IT化がすすんで便利になっても、ユニバーサルデザインへの配慮や、駅員さん(人)

の配置・気配り・目配りは重要で

す。5分別ゴミ箱の推進や喫煙場所の設置などは、利用者のマナーの向上にもつながると思います。また、利用者一人ひとりの買物行動を変えることも社会を変えていく力になるでしょう。そのために社内のグリーン調達をはじめ、駅構内の売店、テナント、イベントでのグリーン商品販売の推進、ホームでの終日禁煙など、現状を精査して、「社会との調和・環境との共生」をさらに一歩すすめて、情報発信につなげていってください。